

選者 川口孤舟

出席者 今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 朱牟田恵洲

星田啓子

投句・選句 伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 土谷堂哉 豊田ゆたか 中川雅夫

長谷見びん 福島正明 古田昇 宮内規雄 山田けい子 山内天牛

山崎亜也 渡邊盛雄

選句のみ 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 橋口隆 早川允章 山本三恵

《互選句》○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

九点 母と来て石段下の初詣 堂哉 (そ・紀・千・龍・隆・び・正・け・亜)

◎白鳥のこくとく白寿の母逝けり 昇 (○そ・紀・孤・五・堂・び・允・○規・○け)

◎点滴の一粒づつの年の暮 天牛 (忠・紀・孤・敏・堂・隆・び・允・亜)

八点 ◎雪残る枝に鶴来て黙しをり 啓子 (紀・孤・孝・堂・ゆ・雅・規・盛)

七点 幕下序二段から宇良・阿炎・・・

這い上がる力士の矜持返り花 盛雄 (○紀・ゆ・雅・昇・啓・亜・け)

六点 畦道に群れる鴉や雪催 そらお (紀・五・孝・規・亜・三)

◎数へでも満でもうれし喜寿の春 五郎太 (紀・孤・た・敏・堂・け)

男同志寄る汁粉屋や日脚伸ぶ 恵洲 (紀・正・昇・○天・け・三)

「空震」の起こせし津波と聞きて

八十路なほ学ぶ語彙あり寒募る 全 (紀・健・龍・ゆ・雅・啓)

◎問題は数々あれど海鼠切る 正明 (紀・○忠・孤・恵・○亜・天)

◎補陀落の海彼方より初日の出 昇 (紀・孤・○健・允・○三・盛)

五点 小三治も播磨屋もをらぬ初御空 紀久男 (忠・恵・敏・正・三)

独り酒初雪静かに眺めけり 忠彦 (紀・健・た・雅・規)

賀状来ぬ友からメール生きており 全 (紀・た・龍・敏・隆)

崖あらば崖に佇ちたし蒼鷹 (もろがへり) 孤舟 (五・健・孝・恵・啓)

中村獅童の息子陽普君初お目見えを祝い

初芝居豆 (まめ) 萬屋の飛び六方 ただしげ (紀・恵・敏・け・天)

大寒や靴音響く絵画展 啓子 (紀・忠・千・ゆ・正)

遺影の妻ふつくら笑顔ナズナ咲く 規雄 (紀・敏・昇・允・三)

四点 妻御機嫌倅一家と年酒酌む 紀久男 (○龍・敏・○允・盛)

灯の点り箆 (おさ) 音漏るる雁木道 孤舟 (紀・忠・○堂・啓)

熊の子の棒一本で担がる 全 (紀・び・昇・三)

割烹着脱ぎつつ歌留多に母も来し
 乳母車に犬乗する老女霜日和
 棟梁の叱咤の声や年つまる
 侘助と日当たりを待つ庭の隅
 退役の移民船にも今日の雪
 ◎新年の風に向かひて或る決意

惠洲 (紀・堂・啓・○盛)
 全 (雅・允・正・盛)
 堂哉 (紀・そ・び・昇)
 雅夫 (そ・紀・○孝・ゆ)
 びん (紀・恵・啓・け)
 啓子 (紀・孤・千・敏)

三点

御慶交ふ歌舞伎座ロビー華やげり
 セーター脱ぐ百万ボルトの静電気
 ◎元朝や番飛び来てしげし鳴く
 初夢の何とささやか分相応
 ◎常盤木も白い花咲く雪の宵
 晩年も余生もわがことおでん煮ゆ
 降る雪や庭に積を飽かず見る
 誰のものならぬ初日の海にあり

紀久男 (千・正・昇)
 孤舟 (忠・千・啓)
 五郎太 (紀・孤・規)
 健介 (紀・龍・盛)
 ただしげ (孤・ゆ・雅)
 惠洲 (紀・ゆ・壱)
 ゆたか (紀・五・孝)
 びん (そ・五・千)
 全 (紀・孤・壱)
 正明 (紀・敏・隆)
 啓子 (恵・孝・隆)
 規雄 (紀・び・け)

新春大歌舞伎「一條大藏譚・奥殿」
 春に酔ふ平氏非道と獅童吼ゆ
 大寒や小劇場は門を閉じ
 元旦や花芽ゆるりと膨らめる
 亡妻の愛称敦ちゃん茶花咲く

二点

◎初荷来る天下の美祿勢揃ひ
 (会津・新潟・伊丹・広島)
 ただの風邪防護服着た医師が診る
 長生きの秘訣に触れし年始かな
 小粒にて果汁たつぷり庭の柚子
 キシキシと初雪踏みて家路かな
 手拍子で締む新春のコンサート
 ひと破り俳句日めくり朝寒し
 冬河原上昇気流にとんび二羽
 翔平のポスター壁に年明くる
 罹患せる修羅場踏み分け去年今年
 ひたむきな駅伝みつつ寝正月
 氏神に参りいつもの破魔矢かな
 初場所や大関昇進皆笑顔
 親子孫がやがやがやと新年会

紀久男 (孤・盛)
 忠彦 (紀・天・)
 五郎太 (紀・敏)
 千恵 (紀・た)
 全 (紀・天)
 全 (そ・紀)
 全 (紀・た)
 健介 (紀・雅)
 びん (○昇・天)
 全 (紀・健)
 けい子 (紀・た)
 全 (紀・龍)
 全 (紀・敏)
 天牛 (紀・規)

一点

地吹雪や渋滞の列先見え
 太公望鯨釣つたと大法螺を
 三人で牛肉つつく二日かな
 千両を買ひし店閉ぢ右往左往
 餅花を俵にかざり祝う暮

そらお (紀)
 孤舟 (五)
 五郎太 (紀)
 千恵 (紀)
 ただしげ (隆)

中村屋の大蔵卿

本心を明かして凜々し初芝居

全 (紀)

幼児の踊り愛らし初歌舞伎

ゆたか (紀)

比叡仰ぎ寒さに抗す吾覚ゆ

雅夫 (紀)

クレラーミユラー美術館展 ユゴッホ

糸杉に月と金星冬銀河

啓子 (健)

乗り初めはちよつと乗り鉄秩父まで

亜也 (紀)

初硯されど葉書の返事のみ

全 (紀)

風花や出会い愉しき無重力

盛雄 (紀)

「ボチボチでんな」の声聞く初えびす

全 (紀)

※※※※※

【句評】

九点句

母と来て石段下の初詣

堂哉

千恵さん・・・足腰の弱くなってきた母上が石段を登れずその下でお詣りするとい

うちよつと寂しさが感じられ共感しました。

龍平さん・・・お母さんと一緒に出掛けられるだけで幸せでは！

隆さん・・・見上げる神社の階段の長さ、参詣客の長蛇の列に諦めたのかも。参

詣に來られた誠実さが感じられる。

正明さん・・・神社の階段の下で見上げて、諦めて帰る。よくある光景です。歳を

取るとは、辛いことですね。

亜也さん・・・「足弱」という言葉を思い出しました。

白鳥のいとく白寿の母逝けり 昇

そらおさん・・・「白鳥のごとく」が天寿を全うした母上に対する愛情に満ちた表現。

孤舟さん・・・高齢まで踊り続けたマイヤ・プリセツカヤを想う。

堂哉さん・・・こんなに詠まれてお母さんは幸せですね！

びんさん・・・きれい過ぎるほどきれいな句。それでよい。白鳥の死ぬるとき、そ

の声やよし。

規雄さん・・・白鳥、白寿、母の言葉の連なり。作者の母への気持ちがちつとり

と伝わってきます。

けい子さん・・・お母様への愛と感謝が感じられます。白鳥の様にそのまま天まで飛

び立たれたのでしょうか。

点滴の一粒づつの年の暮 天牛

孤舟さん・・・点滴に繋がれての年越し。来年こそは退院を願う。

堂哉さん・・・切ないですね。無事に春を迎えられますよう！

隆さん・・・年の暮は時の刻みを意識する時期。点滴の落ちる様で年の暮が利い

ている。

びんさん・・・点滴は点滴の時を刻む。年は逝く。数え日のひととき。

亜也さん・・・時の流れへの凝視と感慨。

八点句

雪残る枝に鴨来て黙しをり

啓子

孤舟さん・・・冬、特に雪の中では鴨も餌を探すに一苦労。枝にとまって思案に暮れる。

堂哉さん・・・一幅の墨絵ですね。冬の静けさが良く伝わって来ます。

ゆたかさん・・・庭の情景が目に浮かびます。

紀久男さん・・・いつもうるさい鴨が雪の枝に静かにしているのを詠んだ。墨絵のようです。

七点句

幕下序二段から宇良・阿炎・・・

這い上がる力士の矜持返り花

盛雄

亜也さん・・・土俵自体に這い上がるイメージも重なって秀逸。

紀久男さん・・・怪我で休場し幕下から復帰した宇良は関学レスリング部出身で多彩でしぶとい決まり手で瞠目します。阿炎の突っ張り押し相撲も見応えあり。下五の季語の斡旋もぴったり。

六点句

畦道に群れる鴉や雪催

そらお

亜也さん・・・「雪催」がピッタリ決まって、画になっています。

数へでも満でもうれし喜寿の春 五郎太

孤舟さん・・・還暦、古稀、喜寿・・・大還暦（百二十）まであるらしいが、ともかくもおめでたい。

ただしげさん・・・人生百年の時代とは言え、ようやく七十七歳へ、その嬉しさがよく分る。

堂哉さん・・・おめでとうございます！先日、私も友人たちと八十になった、ならぬで盛り上がりました

男同志寄る汁粉屋や日脚伸ぶ

恵洲

天牛さん・・・芝居の帰りですかね。まだ日が高いので大の大人も酒にはまだ間があります。汁粉屋がいいですね。

「空震」の起こせし津波と聞きて

八十路なほ学ぶ語彙あり寒募る

恵洲

ゆたかさん・・・同感です。

問題は数々あれど海鼠切る

正明

忠彦さん・・・海鼠はつかみどころない厄介なもの。切るしかないところが面白い。孤舟さん・・・あの奇妙な体形の子鼠の悩みを思えば、身近な問題など小さい、小さい。

恵洲さん・・・海鼠の掴みどころのなさ、正体のわかりにくさなど、確かに問題含みの生き物ですね。

亜也さん・・・海鼠を切る時の独特の抵抗感を思い出しました。鋭敏な感覚と、それへの着眼の功。

天牛さん・・・海鼠がきいていますね。うまくもって来ましたね。

補陀落の海彼方より初日の出

昇

孤舟さん・・・「補陀落渡海船」が目指したのは、南方海上の極楽浄土。健介さん・・・なるほど、初日は彼方補陀落の海から昇るんですね。

紀久男・・・和歌山の寺でミイラになった僧のご遺体を見たことがあります。

五点句

小三治も播磨屋もをらぬ初御空

紀久男

惠洲さん・・・選者も、偶然、これに寂聴を加えて（小三治寂聴吉右衛門亡き年明くる、の一句を提出した。すなわち「同感！」

独り酒初雪静かに眺めけり

忠彦

ただしげさん・・・初雪を見ながらの一人酒、この風流がうらやまし。

賀状来ぬ友からメール生きており

忠彦

ただしげさん・・・年賀状の届かぬ友への気持ちがよく分る。

龍平さん・・・私への今年 賀状来ぬは「通」。一月²⁶日現在 年末に義兄死の方と

養老院入りの方のお二人通知あり、残る¹人は未達。内²人は³年入り社友という嗚呼・イヤなんですよね これが。毎年元旦にはキッチンと賀状が届く大先輩から来ないので取り敢えず一月末まで待ち友人⁴人にも来てない事確認し 奥さま宛手紙書いたら、案の上入院中ではや意識も戻らず六人でお祈りを続けたが三月に逝去された⁵と嘆きの手紙を呉れた友が去年いた。こんな丁寧な人も居るが・・・

隆さん・・・賀状終止のメモが見られる昨今、今年は九十五歳の方からいただいた。九十五才の卒業。今年の賀状は宝にしますと御礼の返事を出した。

崖あらば崖に佇ちたし蒼鷹（もろがへり） 孤舟

健介さん・・・恥ずかしながら、「佇む」はここでは何と読むのか判らず、「蒼鷹」と言う語も初勉強にて、己の浅学を再確認させられました。脱帽。

惠洲さん・・・崖に佇ちたし、と思っているのが鷹なのか、作者なのが分かりにくい⁶が、崖と鷹の取り合わせで、大きな景色になっている。

啓子さん・・・まだ産毛の残る幼鷹でも眼光は鋭くなっている、どこか威厳が感じられる。崖に枝を伸ばす松に佇つ鷹、絵になりますね。蒼鷹、学習致しました。

中村獅童の息子陽普君初お見えを祝い

初芝居豆（まめ） 萬屋の飛び六方 ただしげ

惠洲さん・・・青葉会初芝居の句を一つ採りたくて。4歳の獅童子息の六方健気。小萬屋より小さい「豆」がぴったり。梨園に育つ宿命を思わせる。

天牛さん・・・豆が効いています。こんな使い方今までにありましたかね。

紀久男・・・この世界では「小」は使わず「豆」又は「ちび」と掛声します。

大寒や靴音響く絵画展

啓子

千恵さん・・・一年で一番寒い日、きつと人数制限している美術館も靴音が響く程シーンとしていて余計に寒さを感じた事でしょう。

ゆたかさん・・・静かな館内に響くのは、妙齡のご婦人のハイヒールの音でしょうか。遺影の妻ふつくら笑顔ナズナ咲く 規雄

敏郎さん・・・微笑ましき年輪！？の寂しさ？

四点句

妻御機嫌倅一家と年酒酌む

紀久男

龍平さん・・・わが家の幸せを高らかに詠うのはご立派。日本では中々こういう
アツピールの仕方に出会えないと思います。

敏郎さん・・・この組み合わせ、酒も一番美味でしょうね。

允章さん・・・母親と云うものは息子に会うのが一番嬉しいようだ。いそいそと食
事のサービスをしている様が見える。

盛雄さん・・・親子三代勢揃いで嬉しい正月。さぞ酒も美味しかったでしょう。
妻ご機嫌が良かったですな。

灯の点り篋(おさ)音漏るる雁木道 孤舟

忠彦さん・・・私の田舎の津軽は、昔商店街は雁木通路でした。懐かしく。

堂哉さん・・・雪国の情景が誠に綺麗に詠まれています。夜なべでしょうか？

啓子さん・・・雪の降る街の夕暮れ。灯は赤く灯りまだ機織りをしている音が漏れ
てきます。これも日本の北国の原風景。

割烹着脱ぎつつ歌留多に母も来し 恵洲

堂哉さん・・・母さん！はやく、早くと呼ぶ子供たちの声が聞こえてきます。母さ
んはお正月も大忙し。

啓子さん・・・割烹着、歌留多 日本のお正月の原風景が見えます。

盛雄さん・・・日本の正月の美しいシーンを見る。句に動きの有ること素晴らしい。

乳母車に犬乗する老女霜日和 恵洲

盛雄さん・・・愛犬共々歳重ね、寒い日の散歩の姿をよく見掛けます。下五が効き
ました。

侘助と日当たりを待つ庭の隅 雅夫

孝岳さん・・・日当たりを待ちながら閑寂な境地を楽しんでいる様子が「侘助」と
いう言葉を使つてうまく表現されている。

ゆたかさん・・・庭の隅でひっそりと咲く侘助の様子が可憐です。

紀久男・・・大阪時代、椿が好きで〇種類、侘助も〇種類植えていましたので懐
かしく思い出します。

退役の移民船にも今日の雪 びん

恵洲さん・・・横浜港に係留の氷川丸と推測。かつては華やかに活躍した退役船の
「老後」に積雪。シンパシーを覚える。

新年の風に向かひて或る決意 啓子

孤舟さん・・・新しい年を迎えて、改めて決意をもって生きてゆきたいと思う。
敏郎さん・・・今年の正月は特に風が強かったようです！

三点句

セーター脱ぐ百万ボルトの静電気 孤舟

忠彦さん・・・いつも体験します。百万ボルトの表現が旨い
千恵さん・・・ちよつとビリつと来たくらい静電気なんでしょうけど、驚きが
きつと百万ボルトと大げさに言わせたんでしょうね。

元朝や番飛び来てしばし鳴く 五郎太

孤舟さん・・・番の鳥が鳴き交わす。正月に相応しくおめでたい限り。

常盤木も白い花咲く雪の宵 ただしげ

孤舟さん・・・常緑樹の松の木が、昼の間に積もった雪で真っ白に。景色が随分

変わった。

ゆたかさん・常緑の常盤木と雪の取り合わせが絶妙です。

晩年も余生もわがことおでん煮ゆ 恵洲

ゆたかさん・上五、中七とおでんがよくマッチしています。

亜也さん・なにげなく他人事で使う言葉が自分自身の人生の局面のことと喝破する重さを「おでん」で受け流す妙。

誰のものならぬ初日の海にあり びん

五郎太さん・初日の出を、家族で見に行ったことがあります。周りにたくさんの人がいて拍手が起きました。「誰のものならぬ」は、「誰のものならぬ？」という疑問に「皆のもの」と応じるように受け止めました。

新春大歌舞伎「一條大藏譚・奥殿」

春に酔ふ平氏非道と獅童吼ゆ びん

孤舟さん・新春大歌舞伎の獅童の演技に圧倒された。

亜也さん・「吼ゆ」が獅童らしさを活写。ヒドウとシドウで韻を踏んだり、獅子が吠えたり、結構手が込んでいます。

大寒や小劇場は門を閉じ 正明

敏郎さん・昔はこんなことは決してありませんでした！！

隆さん・コロナ感染対策で閉じられた門。大寒の寒さが一段と増す。音響機器に頼った鑑賞はどこまで行っても本物ではない。コロナ禍で、本物を鑑賞する機会がめっきり減った。

元旦や花芽ゆるりと膨らめる 啓子

恵洲さん・おらかで穏やかな今年の元旦らしい雰囲気が出ているように思う。特に「ゆるりと膨らむ」の表現を買う。

隆さん・花芽へのフォーカス。独特の視点で面白い。「ゆるりと」「膨らめり」の表現が気になる。「知らぬ間に花芽膨らむお元日」では。

亡妻の愛称敦ちゃん茶花咲く 規雄

びんさん・季語？敦ちゃんの茶花は年中季語となるって？なんとも愛おしい句ですね。

二点句

初荷来る天下の美祿勢揃ひ 紀久男

(会津・新潟・伊丹・広島)

孤舟さん・上戸にとっては羨ましい限り。

盛雄さん・会津、新潟、伊丹・広島銘酒が揃ひご機嫌の作者の顔が浮かんできます。

ただの風邪防護服着た医師が診る 忠彦

天牛さん・防護服来たものものしさと、ただの風邪が面白い。

小粒にて果汁たつぷり庭の柚子 千恵

ただしげさん・小さくても果汁がたつぷりの柚子、育てて楽しいですね。

キシキシと初雪踏み家路かな 千恵

天牛さん・キシキシで本当に聞こえるようですね。

ひと破り俳句日めくり朝寒し 千恵

ただしげさん・日めくりのカレンダー、ひと破りして新年。そのような風景を想

像しました。

ひたむきな駅伝みつつ寝正月 けい子

ただしげさん・箱根駅伝を見ながらの正月、のんびりとして楽しそうな気分がよく分る。

初場所や大関昇進皆笑顔 けい子

敏郎さん・・・特に信州出身は例外なさそうですね。

紀久男・・・取りこぼしの多かった御嶽海が見違えるような安定感で大関昇進決めた。信州では雷電以来とマスコミは囁す。万里子先生のご実家は木曾御岳の信州側登り口で御嶽海はその隣町出身です。伊那吟行の折、先生のご実家に泊まり眞希子さんが薪で風呂を立てて下さり小川さんや南平さんが使わせて貰ったことを思い出します。天牛さんは朝飯前に「たも」を持ってひと仕事しておられました。三月の大阪場所での活躍が期待されます。

翔平のポスター壁に年明くる びん

昇さん・・・日本が誇る不世出の大リーガー。翔平君、今年も二刀流応援するよ。野球漫画と言えば故水島新司。発想が凄い！数多くの夢のスターが実現しました。

天牛さん・・・翔平がきている。誰も何も云えないでしょう。

親子孫がやがやがやと新年会 天牛

紀久男・・・中七の措辞が面白い。

一点 太公望鯨釣つたと大法螺を 孤舟

五郎太さん・・・正月の夢、人食っていて面白い。

餅花を俵にかざり祝う暮 ただしげ

隆さん・・・明けて飾る餅花を暮に飾り祝う。暮から華やかな気分になりたい気持ち表れている。

三人で牛肉つくつく二日かな 五郎太

紀久男・・・倅(中年) 含め若い人はおせちは元日だけで、スキヤキや焼き肉を好みます。



青葉会予定

令和四年二月二十四日(木) 正午～十五時 於：赤坂飯店竹橋店 個室

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。締め切り：二月二十二日(火)中。

参加の可否、ご投句のご連絡は：今井宛FAXか郵送、或いは星田メール

(keiko-reve@07.itscom.net) までお願い致します。

郵便は三日かかります(土日の配達はありません)



青葉会報

一、令和四年正月五日(水) 吉例初芝居総見(歌舞伎座第一部) 十一時～十三時半

例年会員以外に芝居好きを含め12名程度のご参加でしたが、今年はゆたかさんご夫妻を入れて6名でした。はねてから銀座ライオンで祝杯。獅子舞は仕舞うところでしたが松の内の正月気分は味わうことが出来、皆さまご満足されたことと思います。

二、1月27日(木) 初句会、十三時〜十六時半 三茶しやれなあど会議室

会員で都心に近い世田谷区民の千恵さんに会場をお願いし、世田谷区三軒茶屋分庁舎5階会議室にて開催。小生持参の、眞希子さんからの下関純米大吟醸「海響」と缶ビール、眞希子さんからお預かりした小倉銘菓「ぎをん太鼓」等と啓子さん持参の市田柿、恵洲さん寄贈の焼きチーズ菓子(柿の木坂 キャトル)を賞味しながらの句会でした。

回覧は、①眞希子さんからの小生宛お手紙 (古稀を機に青葉会退会)

②眞希子さんからの星田さん宛お手紙 (関係者に世話になったお礼、退会の件)

③眞希子さんからの小生宛手紙のFAXをご覧になられた天牛さんの感想コメントのFAX (眞希子さんの趣旨了解。川合万里子先生の痕跡、繋がりを残しておくべき。あのような立派な方と縁を切るのは勿体ないと思う。翻って天牛さんご自身はライフワークとして「アレキサンダー大王」の研究を続けているとのこと)

句会はいつもの五郎太さんの披講でご覧のように堂哉さん、昇さん、天牛さんが高得点でした。句会終了後三茶駅前という場所柄、男性三人で、焼き鳥、焼き肉、居酒屋など小さな店の並ぶ路地の一軒で二次会をやりました。

二、関係者近詠

| | | | |
|-----------------|-----|-----------------|------|
| 露草や秘密でなくて言はぬだけ | 眞希子 | 風邪気味を押して廚に立つ朝 | 陽亮 |
| 老後にて継続挑戦新生姜 | 全 | 「歎異抄」膝に舟漕ぐ日向ぼこ | 全 |
| コロナ禍の立冬讚美歌一番のみ | 全 | あるだけの布団干したくなる日和 | 全 |
| なぜいじめするかを問ふて虎落笛 | 全 | 冬耕やガラスの腰を庇ひつつ | 全 |
| がまずみや歯科へ眼科へ通ふ坂 | 弘子 | 青白く燃ゆる自分史焚火中 | 全 |
| 秋灯や「萬緑」に反る捲り癖 | 全 | 秋芝居テレビに掛声決めてをり | 紀久男 |
| ピストルのやうな検温冬に入る | 全 | 章太郎追悼公演 | 全 |
| 馬鈴薯のざつくりと芽を抉らるる | 全 | 懐かしや新派女形の爽やかに | 全 |
| | | 「森の座」二月号(横澤放川選) | |
| 雲上の友の笑顔を初夢に | 盛雄 | 初夢や宿痾突然消え失せり | 健介 |
| 昇り来る力士の矜持四方拝 | 全 | 初夢や釣り損ねたる大まぐろ | 全 |
| 一病の即かず離れず新日記 | 全 | 初夢に昇天の友次々と | 紀久男 |
| 長寿酒を子と酌み交わすお元日 | 全 | 呆け封じ昇る初日に祈りをり | 全 |
| | | 籠り居に妻の逸品寒鯨 | 全 |
| | | 「きんぎょ句会」一月 | |
| 一水の枯野を分かち煌めける | 允章 | 千両や一夜の雨に紅の濃く | 秋元 宏 |
| 枝移りするたび落とす枯葉かな | 全 | | |
| 立春の鳥影繁き窓辺かな | 全 | | |

四、孤舟選者近詠

網の上の錯乱気味の鮑かな
竹輪浮き玉子の沈むおでん鍋

むささびの翔び常闇の懐に
からつ風シャープ・フラット入り乱る
千枚田千の雪間となりにけり

「爽樹」二月号

五、川合絹漱先生の遺句（その一端をご紹介します）

「萬緑合同句集 2」 中村草田男 編集兼発行 （昭和58年3月1日発行 ¥3000）

古城に永遠に冷たき貌や古酒を飲む 秋風騒ぎラインの面（も）物の影成さず

燭は秋望郷旅愁異なれど やや赤きドイツの土を秋の靴

産院秋灯聖母も母も豊かな胸 ポプラの実ゲルマンの娘らと市電待つ

父の魂と着陸うすやかな月の下 赤ん坊の真青な眼に落葉して

枯葉道妻を想へば口乾く 釣師も土工も身支度固し暁落葉

黄金落葉墓の貴賤を埋めつつあり 中世めく一黒雲来て山なき秋

ジプシー乱舞有色人種の業冴えつ 戦場古りぬ今奥知れぬ霧の牧場（まき）

朝路夕路も定まりたるよ冬の雨 ぬくき秋とや室借りし日に蜂訪ひぬ

時雨を来ぬ病いえての眞赤な帽 秋夕日買ひたる靴を磨く獨り

上り船のラジオは喜劇末枯野 ソプラノは美しき少年ゆ買ふ葡萄かな

※次号にて、万里子先生、眞希子さんの句をご紹介したいと考えております。

令和四年二月十日

紀久男 記